

令和 2 年 7 月 15 日現在

機関番号：35401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2019

課題番号：18H05757・19K20950

研究課題名(和文)読むことにおける理解の深化に資するフィードバックを核とした教育評価に関する研究

研究課題名(英文) Research on effective reading assessment with a focus on feedback to deepen students' understanding

研究代表者

高瀬 裕人(Takase, Yujin)

エリザベト音楽大学・音楽学部・講師

研究者番号：30823083

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：読むことにおける理解の深化に資する効果的な教育評価法の開発を目指して進めてきた本研究において、以下のことを明らかにした。

(1)継続的な形成的評価と効果的なフィードバックが学習者を読むことへと誘ううえで、また更なる読むことを促すうえで重要であること、(2)効果的な読むことの教育評価を実現する上で教師の見取りの力と、教師と学習者による対話の場が必要であること、(3)効果的なフィードバックとして、「指示する」「方向づけ直す」「質問する」「称賛する」「少し言葉を示して発言を促す」等の言葉がけが想定されること、(4)多様な機能をもった言葉がけを、学習者一人ひとりに応じて適時適切に行うことが重要であること

研究成果の学術的意義や社会的意義

情報が溢れている現代社会において、主体的に情報にアクセスし適したものを選択するとともに、手にした情報を適切に読み解き、活用していくことが求められている。本研究では、こうした「読むこと」の資質・能力を育成する上で必要な教育評価法について検討した。

本研究での検討を通して、継続的な形成的評価と学習者への適時適切なフィードバックを実行していくための具体的な道筋を描き出すことができた。本研究で得られた知見は、これからの時代に必要な資質・能力の育成に資する、より効果的な「読むこと」の教育評価法を開発していくことにつながるものである。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research was to develop effective reading assessment. In order to develop the effective reading assessment, I mainly focused on ongoing assessment and teachers' feedback.

Through this research, I clarified four points:(1)By conducting ongoing assessment and giving effective feedback, students are invited and encouraged to read more and more, (2) Teachers' observation and ongoing reading conference are necessary to actualize effective reading assessment, (3)The types of effective feedback is direction, redirection, question, compliment, exemplification, and(4)Effective teachers conduct formative reading assessment on an ongoing basis, give feedback on a timely basis, and differentiate those for every students.

研究分野：教科教育学

キーワード：読むこと 理解 理解方略 理解の成果 フィードバック 形成的評価 継続的评价 国語科

1. 研究開始当初の背景

現在、巷には多種多様な情報が溢れ、人々は情報を手軽に入手することができるようになってきている。そうした中で、数多ある情報を鵜呑みにすることなく、主体的に選択し、解釈・批評し、再構成しながら、新たな価値を創造していくことができる自立した読者の育成が求められている。

この点に関して、これまでもわが国の国語科教育研究においては、自立した読者の育成を最大の目標として掲げ、「読むこと」の学習指導法の開発が盛んに進められてきた。

しかしながら、その一方で、本来であればそうした学習指導法の開発と合わせて行われるべきものである「読むこと」の教育評価法の開発は十分に進められてきたとは言い難い現状にある。たとえば、近年では、「読むこと」の資質・能力観の捉え直し、そしてそうした捉え直しを踏まえた「読むこと」の資質・能力観の拡張が図られてきているが、日々の授業の中で継続的に行われる「読むこと」の教育評価法として、そうした資質・能力観の捉え直しや拡張にしっかりと対応したものが十分に開発・実施されてきているとは言い難い現状にある。これは、「読むこと」の学習指導を通して、学習者が身につける資質・能力や、そこで鍛えられる言葉による見方・考え方がいまだ不明瞭であったり、教育評価の目的や役割が不明確なまま特定の評価方法が使用され続けたりすることによって引き起こされると考えられる。

こうした状況から、たとえ「読むこと」の学習指導の中に教育評価が行われたとしても、それは形骸化したものにしかなり得ないというような状況や、あるいは「評価のための評価」が行われたり「評価疲れ」が起こったりするというような状況が続いてしまうということが予想される。このままでは、国語科の「読むこと」の学習指導を通して、学習者の「読むこと」の資質・能力をしっかりと育んだり、言葉による見方・考え方を確かに鍛えたりすることが十分に実現できないという否定的な結果がもたらされ続けることになるだろう。

以上のことから、自立した読者の育成に資する「学習のための評価」とは具体的にどのようなものなのか、それはいかにして授業レベルにおいて実行可能性のあるものとなるのかを探究することは重要な課題であると考えた。

2. 研究の目的

上に示した研究の背景から、本研究は、国語科の「読むこと」の学習指導を通して、主体的に選択し、解釈・批評し、再構成しながら、新たな価値を創造していくことができる自立した読者の育成に資する「読むこと」の教育評価法を開発することをめざし、学習者の読書行為についての形成的評価とフィードバックに焦点をあて、その特徴について詳らかにすることを目的として設定した。

こうした検討を行うことにより、自立した読者を育成するために、教師が日々の授業においてどのように学習者の成長を見取り、学習者一人ひとりと関わるのか、そしてその中で具体的にどのような言葉をかけていくことが必要になるのかについての知見を得ることができ、情報に溢れた現代社会において求められる「読むこと」の資質・能力の育成に資する、あらたな「読むこと」の教育評価の具体的な姿を描き出していくことができると考えた。

3. 研究の方法

本研究は、大きくふたつの研究方法を用いて行った。

ひとつめは、文献調査である。この文献調査では、「読むこと」の学習指導におけるフィードバックの意義と役割を明確にすることと、効果的なフィードバックの分類整理を行うことを目指した。この文献調査では、国内の関連文献のみならず、英米圏の関連文献を対象とした。ここで調査対象とする文献資料の範囲を広げたのは、これまで研究代表者が行ってきた調査研究において、近年の英米圏の研究では「読むこと」の教育評価についての見直しが積極的に行われていることが明らかになっており、そうした諸研究・実践から得られた知見を参照することにより、自立した読者の育成という目標に資する「学習のための評価」の具体的な姿や、フィードバックの位置づけをより明確にできると考えたためである。

ふたつめは、小学校国語科「読むこと」の授業観察である。上記の文献研究のみでは、生態学的妥当性が高く実行可能性のある「読むこと」の教育評価法を開発することは困難である。そこで、実際に複数回小学校国語科「読むこと」の授業観察を行い、観察した授業における教師と学習者のやりとりの中から、学習者の理解が深化していくうえで効果的であったと考えられるものを抽出・分析することとした。こうした観察にもとづく分析・検討を踏まえることで、先に挙げた文献調査において形づくった「読むこと」の学習指導における「学習のための評価」モデルやフィードバックの類型化について、わが国の教育実践の文脈に即した形で分析・検討を重ねていくこととなり、わが国の教育実践レベルにおいても、その効果を十分に発揮できるようなものへと精緻化していくことが可能になると考えたためである。

4. 研究成果

これまでの研究において、形成的評価やフィードバックが学習者の自分の行為を振り返り、今後を見通すうえで重要な意味をもっていることが指摘されてきた(Sadler 1989, Black & William

1998, Frey & Fisher 2011)。また、学習目標に関連した「どこに向かっているか」という「フィードアップ」の問い、自己評価に関連した「どのように向かっているか」という「フィードバック」の問いに、次の段階や新しい目標に関連した「次にどこに向かうか」という「フィードフォワード」の問いにに応じていくことが効果的なフィードバックの条件であることが明らかになってきている(ハッティ 2018)。さらに、フィードバックのレベルに関しては「課題」に関連したもの、「過程」に関連したもの、「自己調整」に関連したもの、「自己」に関連したものがあ(ハッティ 2018)、またフィードバックの効果に関しては「確認を促す」ものと「精緻化を促す」ものがあることが提示されてきた(Shute 2008)。

本研究では、こうした形成的評価やフィードバックに関連した先行研究から得られた知見を踏まえつつ、米国のリテラシー教育研究者であるモーリン・ボイドとリー・ガルダや、マリー・アドラーとエイジャ・ローグルによる、話し合いを通じた「読むこと」の学習指導に関する提案(Boyd & Galda 2011, Adler & Rougle 2005)、またアイリーン・フォンタスとゲイ・ピネルによる、リテラシーの連続体や真正の「読むこと」の教育評価に関連する提案(Fountas & Pinnell 2017a, b)、さらに米国のリテラシーコンサルタントとしてリテラシーの学習指導法について近年積極的な発言を行っているジェニファー・セラバロによる、「読むこと」の学習指導に関する実践的提案(Serravallo 2015, 2018, 2019)などを取り上げて検討した。

これら米国での「読むこと」の学習指導に関する提案を取り上げた理由としては、上に挙げた形成的評価やフィードバックに関連した先行研究が「読むこと」の学習指導に焦点化したものというよりも、ひろく学習指導全般を対象としていたことが挙げられる。すなわち、ここに挙げたものを取り上げ検討することで、国語科教育学の視点から、そして「読むこと」の学習指導により焦点化したうえで、本研究で得られる「読むこと」の教育評価法に関する知見の妥当性や有効性を高めることができると考えたためである。

また、本研究で対象とした米国で提案された実践は、いずれも理論的検討と実践的検討に堪える文献資料であり、わが国の「読むこと」の学習指導を相対化しつつ、「読むこと」の教育評価やフィードバックに関して、具体的に有益な示唆を得ることができるものだと判断したためでもある。

本研究において、こうした文献に関する検討を進めていく中で確認できたことは、学習者の読書行為において、どのような理解方略が用いられているか、またその理解方略を用いることでどのような理解の成果がもたらされるかを区別して見極めることの重要性である。たとえば、フォンタスとピネルは、読書行為を「作品の中で考える」相、「作品について考える」相、「作品を越えて考える」相という3相から成るものとして捉えていた。そのうえで、彼女たちは、こうした3相からなる読書行為をより具体的に捉えるために、「情報探索して活用する」「モニタリングや自己訂正をする」「言葉の意味を確かめる」「ペースを保って読む」「調整する」「要約する」「予想する」「関連付ける」「まとめる」「推論する」「分析する」「批評する」という、12の理解方略を視点として設定し、それぞれの発展の道筋を描き出していたのである(Fountas & Pinnell 2017a, b)。

ここで提案されている読書行為や理解方略使用の発展の道筋を参照しながら、教師がそれぞれの理解方略がどのようなものか、その時、読者は作品とどのように向き合っているのか、またその成果はどのようなものかを具体的かつ的確に見極めておくことにより、螺旋的に繰り返される「読むこと」の学習指導を通して、学習者はどこにどのように向かっているのか、また次にどこに向かうべきかをその道中において適切に見極めることができ、それぞれのペースや、さまざまな道筋をたどって成長していこうとする学習者たちの歩みに寄り添いながら、しっかりと支えていくことができるようになるのである。それは、こうした彼女たちの取り組みが、効果的な「読むこと」の教育評価を実現していくうえで必要な「読むこと」の構成概念をしっかりと把握していくためになされたものだったと位置づけることができるからである。

また彼女たちの取り組みに関して検討していくことを通して、こうした継続的な形成的評価とそれにもとづくフィードバックが適切な時に適切な形で提供される環境の中で学習経験を積み重ねていくことにより、学習者たちは読書へと誘われ、また「読めた」という実感をもってさらなる読書へと向かうことになっていくのではないかという見通しを得た。

さらに検討を進めていく中で次に明らかになったのは、こうした形成的評価とフィードバックが効果を発揮するのは、「読むこと」の学習指導の中でのほんもの話し合い(Boyd & Galda 2011)や、カンファランスの中での教師と学習者(たち)との対話(Serravallo 2019)においてであるということであった。ここで得た知見をもとに、「読むこと」の学習指導の中で展開されるほんもの話し合いや教師と学習者(たち)との対話は、実のところ、学習者(たち)が目指すよりよい読書行為に関するさまざまな規準を吟味しながら内面化していくための格好の機会だと位置づけることができた。また、ここでの検討を通して、こうした質の高いほんもの話し合いやカンファランスを継続的に経験していくことにより、学習者(たち)は内面化していく読書行為に関わる規準を徐々にではあるが、より確かなもの、精緻化したものへと発展させていくという

道筋を描き出すことができた(Adler & Rougle 2005)。

さらに、教室での「読むこと」の学習指導の実際を観察していく中で見えてきたことは、そこで行われるフィードバックは学習者一人を対象としたものだけではないということである。教師側から整理すると、特定の学習者に対するもの、特定のグループに対するもの、クラス全体に対するものという3つの規模を対象としたものを想定することができた。また、これを学習者の受け止め、あるいは学習者への影響という視点から整理すると、自分の読書行為に直接的に関係のあるもの、間接的に関係のあるものという二つの極の連続体のうえにあるものだと想定することができた。こうした整理からは、教師の意図と学習者の実際の受け止め方が決して一対一対応のものとして捉えうるようなものでもなく、教師のフィードバックもまた学習者によって選択されたり解釈されたりする中で受け止められているということが示唆された。こうした点から改めて、継続的な形成的評価とフィードバックを踏まえたうえで、学習者一人ひとりが規準をより確かに内面化し、精緻化したものにしていく機会を保証していくこと、またそうした学習者の評価規準についての学びを促していくための具体的な方法を考えていくことが必要であることが確認された。

最後に、「読むこと」の学習指導において教師がどのような言葉がけを行っているかという点について分析・検討した。この点に関して、本研究では、米国で提案されている実践に関する分析・検討ならびに、日本での「読むこと」の授業に関する分析・検討を行った。その結果、「読むこと」の学習指導において教師が用いているフィードバックとしての言葉がけには、特定の行為を実行することを求める「指示する」言葉がけ、いま使っているのとは別の方法を試すように誘う「方向づけ直す」言葉がけ、読者に自分の読書行為を振り返るように促す「質問する」言葉がけ、特定の行為を取り上げて価値づけ、読者にその行為を継続するように促す「称賛する」言葉がけ、意見を述べ始めるときの言葉や意見をまとめるときの言葉などを少し例示してみせることで読者を励ます「少し言葉を示して発言を促す」言葉がけ、というようにそれらの言葉の機能の面から多様なものがあることが確認された(Serravallo 2015, 2018, 2019)。

また、このような文献調査と合わせて小学校国語科「読むこと」の授業観察を行ったことで、こうした教師の多様な言葉がけが実際の教室談話の中にも確かに存在しているということを確認することができたとともに、教師は決して一定・一律にそうした言葉がけを用いているわけではなく、その場に応じて学習者一人ひとりに対して使い分けているということを明らかにすることができた。

以上の検討を踏まえ、本研究では、以下の4点の成果を明らかにすることができたと考える。

- (1) 「読むこと」の学習指導における継続的な評価と効果的なフィードバックが、学習者を読むことへ誘うとともに、さらなる読むことを促していくうえで重要な役割を担っているということ
- (2) 「読むこと」の学習指導の中で、学習者の理解の深化に資する効果的な教育評価を実行していくためには、「理解方略」と「理解の成果」を観点とした教師の見取り、教師の見取りと学習者の実感をすり合わせて、規準を共有していく対話の場、対話の場における教師からのフィードバックとしての適時適切な言葉がけ、が必要であるということ
- (3) 効果的なフィードバックの具体的な方法として、「指示する」「方向づけ直す」「質問する」「称賛する」「少し言葉を示して発言を促す」といった多様な機能をもった言葉がけがあるということ
- (4) 学習者との対話の場において、教師が上記の機能をもった言葉がけを柔軟に、そして学習者一人ひとりに応じて用いていくことにより、学習者にとって有意義なフィードバックとして機能し、読者として成長していくことも促されることになるということ

なお、本研究において検討してきた「読むこと」の教育評価法は、これまでの教室の中で用いられてきた言葉や、教師と学習者の関わり方を見つめ直し、編み直すことを求めるという側面をもったものでもあった。

以上のことを踏まえ、本研究において得られた知見から、「読むこと」の学習指導における形成的評価とそれを踏まえたフィードバックを充実させていくための具体的な道筋を描き出すことが可能になったと考える。さらに、本研究において見出された研究成果は、これからの社会を生き抜くうえで学習者たちに求められる「読むこと」の資質・能力を確かに育てていくうえで必要となる、あらたな「読むこと」の教育評価法を構想し開発していくことにつながる重要な示唆をもたらすものであると考えている。

(主要参考文献)

- ・ Adler, M. & Rougle, E. (2005) *Building Literacy Through Classroom Discussion: Research-Based Strategies for Developing Critical Readers and Thoughtful Writer in Middle*

School, SCHOLASTIC

- Afflerback, P. (2017) *Understanding and Using Reading Assessment, K-12 (3rd edition)*, ASCD.
- Black, P. & William, D. (1998) *Assessment and Classroom Learning, Assessment in Education: Principles, Policy and Practice*, Vol.5, No.1, pp.7-74
- Boyd, M.P. & Galda, L. (2011) *Real Talk in Elementary Classrooms: Effective Oral Language Practice*, The Guilford Press.
- Fountas, I.C. & Pinnell, G.S. (2017a) *Guided Reading: Responsive Teaching Across the Grades*, Heinemann
- Fountas, I.C. & Pinnell, G.S. (2017b) *Literacy Continuum: A Tool for Assessment, Planning, and Teaching*, Heinemann.
- Frey, N. & Fisher, D. (2011) *The Formative Assessment Action Plan: Practical Steps to More Successful Teaching and Learning*, ASCD.
- Hattie, J. & Timperley, H. (2007) *The Power of Feedback, Review of Educational Research*, Vol.77, No.1, pp.81-112
- ジョン・ハッティ, 原田信之(訳者代表) (2017) 『学習に何が最も効果的か』 あいり出版.
- ジョン・ハッティ, 山森光陽(監訳) (2018) 『教育の効果』 図書文化.
- Sadler, D.R. (1989) *Formative assessment and the design of instructional system, Instructional Science*, vol.18, Issue2, pp.119-144
- Serravallo, J. (2015) *The Reading Strategy Book: Your Everything Guide To Developing Skilled Readers*, Heinemann
- Serravallo, J. (2018) *Understanding Texts & Readers: Responsive Comprehension Instruction with Leveled Texts*, Heinemann.
- Serravallo, J. (2019) *A Teacher's Guide to Reading Conferences*, Heinemann.
- Shute, V.J. (2008) *Focus on Formative Feedback, Review of Educational Research*, Vol.78, No.1, pp.153-189

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 高瀬裕人	4. 巻 1214
2. 論文標題 自立した読者を育成するための 学習としての評価	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 学校教育	6. 最初と最後の頁 44 47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高瀬裕人	4. 巻 1218
2. 論文標題 実の場での評価 としての教師の観察	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 学校教育	6. 最初と最後の頁 30 33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高瀬裕人	4. 巻 39
2. 論文標題 「読むこと」の授業における教師の形成的評価とフィードバック：教師の即応的発問に関する検討を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 エリザベト音楽大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 23 31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高瀬裕人	4. 巻 15
2. 論文標題 中学生の「読むこと」における理解構築を促す教育評価： 対話的学習指導 における評価に関する検討を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 論叢国語教育学	6. 最初と最後の頁 33 42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） doi/10.15027/48805	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 高瀬裕人
2. 発表標題 どのような評価が中学生の「読むこと」における理解を促すのか：Jennifer Serravallo(2019)A Teacher's Guide to Reading Conferencesを中心に
3. 学会等名 全国大学国語教育学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----